

状況判断における課題解決を通して  
運動の特性を学習する生徒の育成に関する研究

小川勇之助・半田良廣

群馬大学教育実践研究 別刷

第36号 289～295頁 2019

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター



# 状況判断における課題解決を通して 運動の特性を学習する生徒の育成に関する研究

小川 勇之助<sup>1)</sup>・半田 良廣<sup>2)</sup>

1) 群馬大学教育学部附属中学校

2) 群馬大学教育学部非常勤講師

Research on training of the student who learns the characteristic  
of a movement through the solution in circumstantial judgment.

Yunosuke OGAWA<sup>1)</sup>, Yoshihiro HANDA<sup>2)</sup>

1) Junior high School attached to Gunma University

2) Part-time teacher at Gunma University

キーワード：運動の特性, 自己調整学習

Keywords : Characteristics of the movement, Self-Regulated Learning

(2018年10月31日受理)

## 1 はじめに

平成29年改訂の学習指導要領では、中学校保健体育の目標に「運動の特性に応じた技能等を理解し、基本的な技能を身に付けるようにする」、「自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断する」、「他者に伝える力を養う」こと等が示された<sup>1)</sup>。また、中学校学習指導要領解説保健体育編でも「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を育成することの重要性が強調されている<sup>2)</sup>。さらにその中で、「攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする」ことが大切であるとしている。

一方、筆者らはこれまでの実践で、スモールステップやタスクゲームを使った段階的な学習、ICTを用いた技能の修正、視点を明確にしたアドバイスなどで課題を解決することにより、「分かった」、「できそう

だ」、「やってみたい」等の運動有能感が高まることを見いだしてきた。これを踏まえて、特に球技において、課題をチームで協力しながら解決する学習を通して、技能を向上させる取組を行ってきた。球技では、状況を判断し、チームで課題を解決する過程で、個人や集団の技能が上達していく喜びや楽しさを感じることが出来る。また、仲間と連携したチームプレーが求められる、そうした運動の特性を味わうことができる。例えば、バレーボールのラリー、ソフトボールの進塁を防ぐ守備、バスケットボールの空間を使ったパスのつなぎなど、各種目の運動の特性を味わいながらチームプレーを楽しむことができると考えられる。

以上のことから、本研究は、巧緻性を高める動きを伴う球技に焦点を当て、技能を高める活動をチームで行う中で、「状況判断における課題解決を通して、運動の特性やチームプレーを楽しむ生徒の育成」を目指したものである。今回、その実践した内容とその有効性について報告する。

## 2 球技学習における自己調整学習

個人やチームの課題を発見して解決するためには、学習者の主体的な参加が必要である。主体的な学習の取組については、自己調整学習 (Self-Regulated Learning) の概念が近年注目されている。自己調整学習のサイクルについて、ジーマーマンら (1996) は図1のようなモデルを示している<sup>3)</sup>。現在のレベルを自己評価するところからサイクルの第1ステップが始まり、右回りにサイクルが繰り返される。

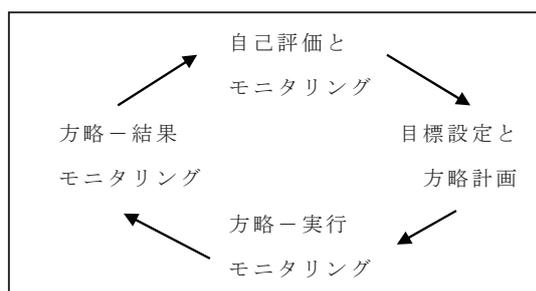


図1 自己調整学習のサイクルモデル

球技の学習にこれを当てはめると、図2のようになる。第1ステップとして、「技能の獲得状況」、「自分・仲間・相手の動き方」、「チームの作戦」等の自己評価から始まると考えられる。第2ステップとして、現状を改善するための方略として「練習方法」を考えることになる。第3ステップでは、その練習を実際に行う。第4ステップとして、練習した効果を見極める。

- |   |
|---|
| <p>①自己評価 (技能の獲得状況, 自分・仲間・相手の動き方, チームの作戦等)</p> <p>②練習方法</p> <p>③練習の実施</p> <p>④練習効果の見極め</p> |
|---|

図2 球技学習におけるサイクルモデル

## 3 研究の目的

技能の習得やプレーを楽しむために、生徒が課題をどのように見つけ、解決しているのかを明らかにする。また、技能を向上させるために、つまづきに気付かせる課題設定、状況判断が必要な課題設定の工夫について実践し、その有効性について検証する。

## 4 研究の方法

### 4.1 授業実践①

- ・実施時期：平成29年5月 (10時間扱い)
- ・対象：A大学附属中学校 第1学年
- ・題材：バスケットボール 「球技」領域

### 4.2 授業実践②

- ・実施時期：平成29年6月 (10時間扱い)
- ・対象：A大学附属中学校 第2学年
- ・題材：ソフトボール 「球技」領域

### 4.3 アンケート調査

- ・調査時期：①平成29年4月 ②平成29年6月
- ・調査対象：A大学附属中学校 1年生80名  
2年生64名

以上を時系列に並べると次のようになる。

- (1) 4月 アンケート調査①
- (2) 5月 授業実践①
- (3) 6月 授業実践②
- (4) 6月 アンケート調査②

## 5 授業実践について

技能向上のためには、前述した図2のようなサイクルが必要である。この中で最初のステップである自己評価の中で課題に気付くことが、練習内容を決める出発点となり特に重要であると考えた。そこで、授業を行う際、次の2点について生徒への与え方を工夫した。

- (1) つまづきに気付く課題設定の工夫
- (2) 状況判断が必要な課題設定の工夫

### 5.1 つまづきに気付く課題設定の工夫

自分たちの現状を把握し、課題解決の出発点に立つためには、何につまづいているのかに気付く必要がある。そこで、つまづきに気付くための課題の設定について工夫した。

- (1) ポイント確認用紙 (図3参照)

教員が用意した技能や戦術のポイント確認用紙にチェックを行い、できているポイントはチームの作戦

として活かし、できていないポイントをチームの「つまずき」として理解させた。その解決に向けた練習方法を選んで取り組ませ、課題解決につなげた。

(2) チームワークシート (図7参照)

各チームごとに、チームの全員がコメントを記入するためのチームワークシートを用意して、各チームのキャプテンにメンバーのコメントに目を通させた。これにより、個々の「つまずき」をチームで共有させ、チームとして解決するための課題を設定させた。

5.2 状況判断が必要な課題設定の工夫

球技の特性を味わうためには、状況をとっさに判断して適切にボールを処理してプレーする技能が求められる。「ボールの操作」、「自分・味方・敵の動き」、「空間」に着目して状況判断することは、単純な動きの練習ではなかなか身に付かない。この状況判断能力の現状を把握させるために、試合状況を想定した練習を設定した。例えば、攻撃人数を増やして行う数的有利(アウトナンバー)な状況を生み出すタスクゲームを取り入れる。技能レベルが低い生徒でもチームプレーができるように、時間制限を設けてボールを操作できる状況を生み出したり、味方や敵を認知する場面を確保したりする新たなルールを設定などを行った。

6 授業実践① (バスケットボール)

6.1 目標

ボール操作やボールを持たない動きのポイントを学ぶことを通して、ゴール前での攻防を展開する能力を育成する。

6.2 授業実践①の概要

6月の球技大会に向けて、第1学年はゴール型ゲームのバスケットボール、ベースボール型ゲームのソフトボールのうち、どちらか一方を生徒が選択して練習に取り組んだ。対象生徒のほとんどは、バスケットボール、ソフトボールともに小学校で未履修であった。題材導入時はボールに対する恐怖心やパス・シュートの技能を不安視する生徒が多かったので、ボール操作の基本練習を毎時間取り入れた。また、ゴール型ゲームの特徴である「空間に走り込むなどの動き」で、自分やチームのつまずきに気付くことがで

きるように、タスクゲーム時に技能や戦術のポイントができていたかチェックさせた。チェックが付かないところは自分たちの課題であることに気付かせ、課題解決に繋がる練習法を選択させ、自ら考えて練習に取り組ませることによって、個人やチームの技能向上を目指した。さらに、ゲームのスコアシートを書かせ、相手チームの特徴を分析させた結果、相手チームの特徴に応じた攻撃や守備を練習したり、自分たちの特徴を活かした練習方法を考えたりすることができた。

6.3 つまずきに気付く課題設定

図3は、授業実践①の「ポイント確認用紙」である。1学年ではバスケットボール未履修の生徒が多かったことから、技能や戦術のポイントについて理解している生徒が少なかった。そこで、ポイントチェックを用いて、技能や戦術のポイントを明示した。ポイン

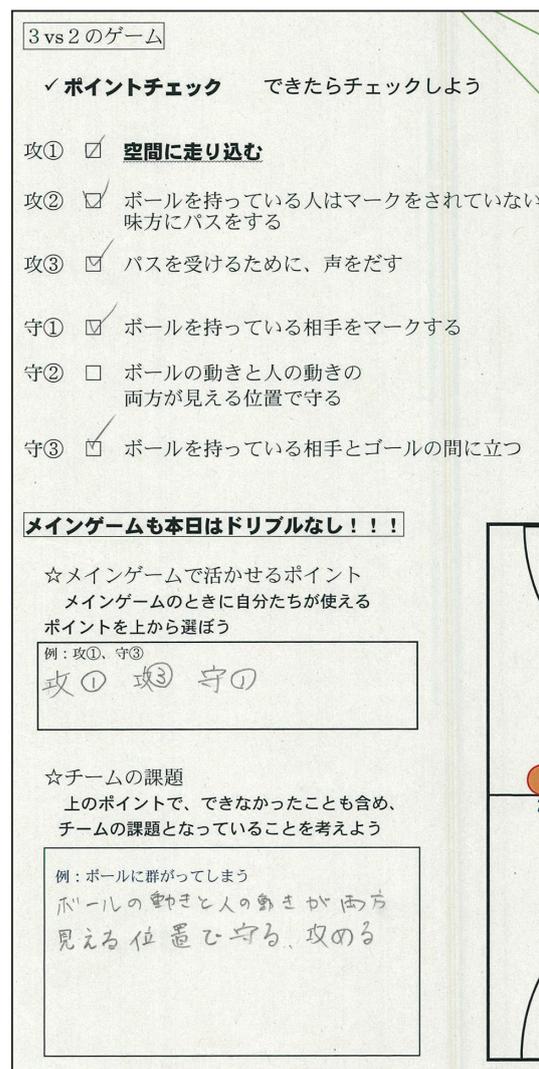


図3 ポイント確認用紙

トを知った上で数的有利なタスクゲーム（3対2）に取り組むことで、できること・できないことが明確となり、課題解決への意識が高まった。また、チームの課題欄を設けたことによって、自分たちができたことはチーム作戦としてゲームに活かそうとし、自分たちができないことは、つまりきとして解決するための練習方法を考えようとする意識を生むことができた。

#### 6.4 状況判断が必要な課題設定

ドリブル、パス、シュートなどのボール操作はウォーミングアップに毎時間取り入れ、個人の技能を高めてきた。タスクゲームでは試合の一場面を想定して、瞬時の状況判断が求められるようにした。例えば、パスの技能に特化したタスクゲームでは、ボールを運ぶ手段であるドリブルを制限し、ボールを持たない人が動かなければ得点できないようにしたり、攻撃人数を増やして数的有利（アウトナンバー）な状況をつくり、マンツーマンディフェンスでも1人は自由に動き回れるようにしたゲームを行った。その結果、ボールを持たない人の動きや「空間に走りこむ」ことに着目することができるようになり、導入の時に見られ、ボールに群がってパスが回らないという場面が減り、コート内に広がってパスが回るようになった。図4は、技能向上を実感した生徒の感想である。

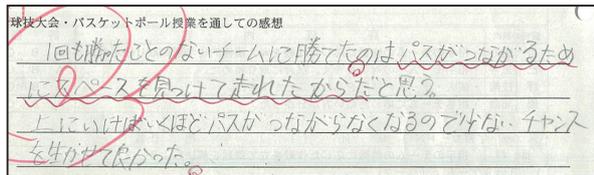


図4 技能向上を実感した生徒の感想

また、図5は相手を分析するためのスコアシートである。シュート回数とシュートが決まった回数を記録させる簡単なものであるが、得点だけでは見えてこない試合の様子を見ることができる。試合のないチームにこのスコアシートを書かせることによって、ただ試合を見ているのではなく、試合観戦の視点を与えるとともに、相手チームの誰がシュートをたくさん打っているのかなどが分かる。

図5の中で、「チーム4Aの22番と7番がパスカットやシュートを何回もやっていた」ことを分析している。分析したチームは、次にこのチームと対戦したと

図5 スコアシート

き、7番と22番にマークをつけるように作戦を講じていた。また、チーム練習ではアウトナンバーで敵役をつくり、状況を再現しながら練習を行っていた。

図6は「技術だけでなく、工夫の仕方を学ぶことができた」という授業後の感想である。

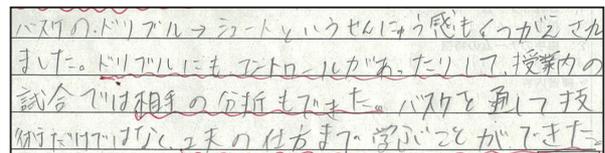


図6 工夫についての感想

## 7 授業実践②（ソフトボール）

### 7.1 目標

ボール操作やバット操作の基本的な技能、走者の位置に応じた定位置での守備、送球を身に付けて、仲間と協力しながら攻防を展開する能力を育成する。

### 7.2 授業実践②の概要

6月の球技大会に向けて、第2学年はゴール型ゲームのバスケットボール、ベースボール型ゲームのソフトボール、ネット型ゲームのバレーボールの3種目のうち、第1学年で経験していない種目を優先して生徒に選択させた。第2学年の授業で、既に全員がソフト

ボールを履修している。

題材の導入では、捕球する恐怖心やねらった所に投げる技能に対する不安を抱えた生徒が多かったので、「ボール操作」の練習を第2学年ソフトボール授業から引き続き毎時間取り入れた。また、ベースボール型ゲームの攻防の特徴でもある「打撃による出塁・進塁・得点する攻撃と仲間と連携した守備のバランスのとれた攻防の展開」について、チームの攻守の連携を深めることを目的に、チーム間でチームワークシートの交流をさせた。また、前述した内容と同様に、各チームのキャプテンがチームワークシートのコメントをチェックして、個々の「つまずき」をチームで共有して解決することを行った。

7.3 つまずきに気付く課題設定

図7は、授業実践②のチームワークシートである。

No.	日付	主な学習計画	学習の反省	意欲	工夫	技能
1	5/1	試しのゲーム	あまルールが把握できていないから少し練習したい。	B	B	C
2	5/2	基本的な技能の確認①	キャッチの仕方をも改めて確認できてよかった。モチベーションを上げて練習した。	A	B	B
3	5/10	練習リーグ戦	見学だ、たかチームがやっているのを見てポイントをつかめた。	A	A	/

The image shows a handwritten team worksheet with multiple entries. It includes dates like 5/16, 5/17, 5/24, 5/30, and 6/1. The notes describe various activities such as '試合1' (Game 1), '試合2' (Game 2), and '練習リーグ戦' (Practice League Game). There are many handwritten annotations in red and black ink, including phrases like 'ボールを取る時にグループで', 'キャッチの仕方をも改めて確認できてよかった', and 'モチベーションを上げて練習した'. There are also diagrams and drawings, such as a diagram of a baseball field and a diagram of a player's stance. The bottom part of the page has a section titled '球技大会の感想・学習のまとめ' (Reflection on Sports Meeting and Summary of Learning) with more handwritten text and diagrams.

図7 チームワークシート

当初、攻守の連携について、チームの技能や課題、戦術の共有などを理解している生徒は少なかった。チームワークシートを活用することで、1人1人がチームのために貢献しようとする行動が次第に見られるようになり、一人ではできないチームプレーが生まれた。また、成功経験をチームで共有することができるようになった様子が、記述してある内容から把握できる。

8 アンケート調査の結果と考察

アンケート調査は、2回の授業実践を間に挟んで実施することで、授業実践の前後での生徒の考え方の変化を見た。質問項目は次の3つで、いずれも複数選択が可能である。

表1 アンケート内容

質問1: 自分やチームの課題を的確に見つけるにはどのような方法が適切ですか(複数選択可)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で気付く</li> <li>・友達からの指摘</li> <li>・先生からの指摘</li> </ul>
質問2: 試合で難しいと感じることは何ですか(複数選択可)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミスが多い</li> <li>・状況判断ができない</li> <li>・思った通りに動けない</li> <li>・とっさに動けない</li> <li>・動き方が分からない</li> </ul>
質問3: どのような練習をすると上達すると思いますか(複数選択可)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の技能や動き方の練習</li> <li>・味方の動き方の練習</li> <li>・ボールに触れていない人の動き方の練習</li> <li>・空間の使い方の練習</li> <li>・試合で起こりうる状況の練習</li> <li>・相手の動き方を想定した練習</li> </ul>

質問1は、「(1) 課題を見つけることについて」の質問である。技能向上の課題が分かれば、主体的に練習してチームプレーに生かそうとしていく。それがチームプレーに繋がり、成功経験をチームで共有することができれば、球技の特性を味わいながら仲間と楽しくプレーすることができると思う。その課題を見つけるきっかけについて質問している。

質問2は、「(2) 適切な状況判断について」の質問である。試合中の状況を適切に判断して技能を発揮す

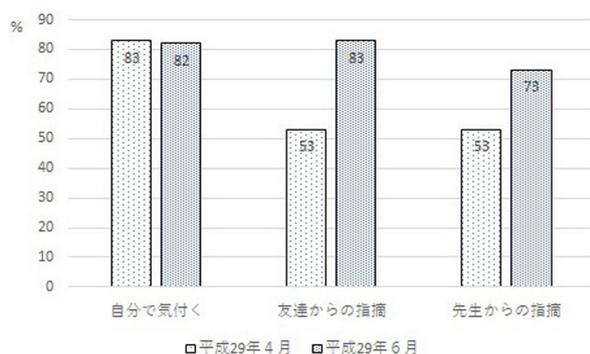
るためには、その場面における「ボール操作」、「自分・味方・敵の動き」、「空間」に着目して課題解決ができる思考力・判断力が重要であると考えられる。適切な状況判断において難しいことを質問している。

質問3は、「(3) 技能の向上について」の質問である。授業では様々な技能の生徒が混在し、ボールに対する基本的な動き方や状況を判断してボールを処理する能力に差が見られる。球技に慣れていない生徒は試合でボールを適切に処理できないために球技の特性が味わえず、楽しめない場面が見られる。どのような練習が技能向上に繋がったかを質問している。

### 8.1 課題を見つけることについて

質問1の「自分やチームの課題を的確に見つけるにはどの方法が適切ですか」については、表2の通り、授業実践の前と授業実践の後を比べたとき、「自分で気付く」と回答した生徒はほぼ横ばいとなっている。一方、「友達からの指摘」、「先生からの指摘」については、授業実践の後が高い値となった。

表2 課題を見つけること

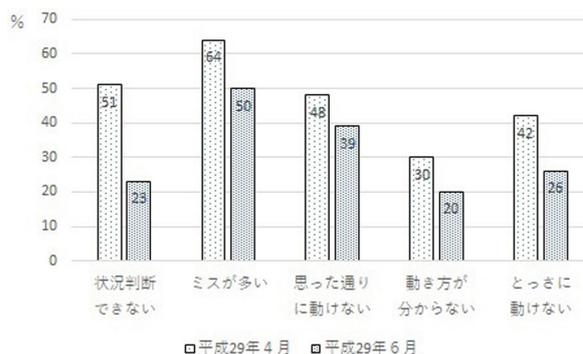


このことは、キャプテンがチームワークシートのコメントに目を通してチームとして課題を共有したこと、成功した経験をチームで共有することができたこと、さらには、授業が進むごとに主体的に課題解決に向けて取り組む意欲が高まり、周囲の助言が入りやすくなったこと等が考えられる。

### 8.2 適切な状況判断について

質問2の「試合で難しいと感じることは何ですか」については、表3の通り、授業実践の前と授業実践の後を比べたとき、全ての項目で授業実践の後に減少が見られた。特に、「状況判断ができない」の項目にお

表3 適切な状況判断



いて著しく減少している。

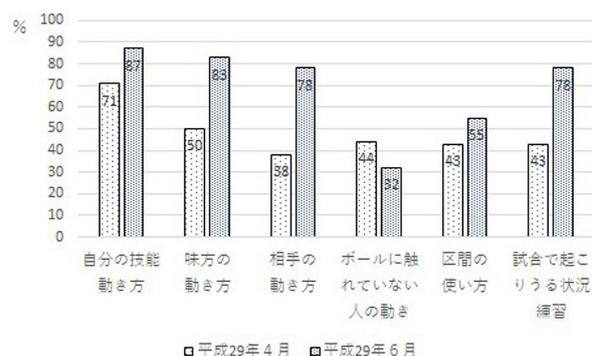
このことは、授業実践を行う中で、周囲の様子が把握しやすくなり、生徒一人一人が適切な状況判断ができるようになってきたためと考えられる。「ボールの操作」、「自分・味方・敵の動き」、「空間」の視点から課題解決ができるようになり、思考力・判断力を高めていくことができたためと考えられる。

### 8.3 技能の向上について

質問3の「どのような練習をすると上達すると思いますか」については、表4の通り、授業実践の前と授業実践の後を比べたとき、「試合で起こりうる状況の練習」の項目が、授業実践の後に高い値となった。

状況を適切に判断するような練習をチームで設定したことで、一人一人のプレーが成功した回数が増え、さらにチームプレーが増えてきたことで喜びを共有した場面が増えたためと考えられる。授業では様々な技能の生徒が混在するが、ボールに対する基本的な動き方や状況を判断してボールを処理する練習を行ったことや試合で起こりうる状況を想定した練習をしたことでプレーが成功し、一人一人が自信をもって球技を楽しむ姿がうかがえた。

表4 技能の向上



## 9 まとめ

本研究は、球技の学習を1例として、運動の特性を理解してチームプレーを楽しむ生徒を育成するための方法を検討したものである。

授業実践では、技能を向上させるために、①つまずきに気付かせる課題設定を工夫すること、②状況判断が必要な課題設定を工夫すること、について実践した。その結果、「課題を見つけること」や「適切な状況判断」、「技能の向上」について生徒の意識が向上している変化が見られた。

今回の実践では、途中から、体育の授業以外でも生徒同士がワークシートを通して活発に意見を交換する姿が見られるようになった。生徒たちの「向上したい!」という意欲が、課題解決に向けた主体的な活動に繋がっていることに、大きな感銘を受けた。

今回は特に、自己調整学習サイクルの第1ステップ

に焦点を当てたが、他のステップにおけるコーチングなどについても今後検討を加える。

### 〈引用・参考文献〉

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領，p.11，2017
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編，pp.24-25，2017
- 3) バリー・J・ジーマン，セバスチャン・ボナー，ロバート・コーバック：「自己調整学習の指導」，p.11，北大路書房，2008
- 4) 岩田 靖：「ボール運動の教材を創る」，大修館書店，2016
- 5) 高橋 誠：「新編 創造力事典」，日科技連，2002
- 6) 鈴木直樹・鈴木理・土田了輔・廣瀬勝弘・松本大輔：「だれもがプレイの楽しさを味わうことのできるボール運動・球技の授業づくり」，教育出版，2010
- 7) 教育調査研究所：「小・中学校における「アクティブ・ラーニング」の現状と今後の課題」，教育調査研究所，2015
- 8) 教育課程研究会：「アクティブ・ラーニングを考える」，東洋館出版社，2016

(おがわ ゆうのすけ・はんだ よしひろ)

